

◎現代の食料問題における楽観主義を映し出す鏡

海野 洋著

食糧も大丈夫也——開戦・終戦の決断と食糧

2016年5月
農林統計出版 定価（本体価格5500円＋税）

評……京都大学地域研究統合情報センター助教 中山大将

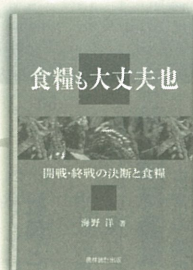
戦争の敗因を冷静に分析することは、時代遅れで無意味なことであろうか。

本書の関心はおおまかに、

(一) 日米開戦の決断時、(二) その後の戦況の推移、(三)

戦争終結の決断時の各段階において、「為政者」が戦争遂行のための食糧問題をどのように把握し対処していたのかにある。序章と第一章では日米開戦にいたる前史を食糧問題を中心に概説し、第二、三章では前記(一)の段階を、第四～九章では(二)の段階を、第十章では(三)の段階について、一次史料や当事者たちの回顧録などから丹念に検証している。

日本軍が輻重(物資運搬)を軽視し、しばしば「希望的観測」に陥っていたということはすでに指摘されてきたことで



あるが、文官も含め初期段階から食糧の必要量や輸送方法などについての検討が不足していたこと、また、内地(帝国憲法発布時の主権範囲)を中心に計画や把握がなされ、朝鮮、台湾といった新領土との間の連携体制も不十分であったことを本書は明らかにする。そもそも近代帝国における総督制とは英帝国や露帝国のように遠隔地統治のための制度であり、海を隔てているとはいえ近接した朝鮮や台湾を一体化して帝国経営をするには不向きな制度だったのではないかとさえ思えてくる。

「戦争で勝って食糧で負けた」というドイツ帝国を教訓に、日本においても第一次世界大戦後から総力戦体制構築が構

想されていたにもかかわらず、このような結果に終わったことには呆然とするが、たしかに敗戦それ自体の物資面での主要因はあくまで鉱物資源や兵器であり、食糧ではないことを鑑みれば、書題にもなっている鈴木貞一企画院総裁が日米開戦前の閣議で述べたという「食糧も大丈夫也」という言葉はあながち浅見ではないのかもしれない。

本書は歴史研究ではあるが、著者が官庁勤務の経歴を持ったためか、白書や内部報告書のごとき文体筆致であり、むしろ実務経験者には本職である歴史研究者の執筆した書よりも読みやすいかもしれない。戦争立案計画遂行においてたびたび顔を出す楽観主義の根源を、著者は「豊葦原瑞穂の国」「神国日本」という自己イメージに認めている。後世から見れば現代日本の食料政策として救いようのない楽観主義によって進められているのかもしれない。現代の食料問題に携わる実務家にあっても、先人の失敗と限界、あるいは工夫と努力を知ることが決して無意味ではないはずである。食料問題について真剣に考えたいならば一読の価値がある。